

二〇一三 ひゅうまんらいっ

奈良大学附
属高等学校
人権教育部

俳優渥美清といえば、誰もが「寅さん」を思い出されることでしょう。『男はつらいよ』シリーズの「ぼくの叔父さん」で、寅さんが甥の満男に酒の飲み方を教えるシーンがあります。「まず片手に杯を持つ。つぎに酒の香を嗅ぐ。酒のにおいが鼻の芯に染み通ったら、おもむろに一口飲む……」寅さんの居酒屋での講義は、実に立派なものでした。ただし、飲み過ぎて勘定も払えない始末となり、いつものように妹のさくらに迷惑をかけてしまう。寅さんらしい結末です。

大学（以降、慶応）で実施されました。スポーツで顕著な成績を残した人物などに、特別入試の制度を設ける大学は従来からありましたが、AO入試導入当初は、画期的な入試制度として注目され、以後多くの大学で実施されてきました。しかし、一般入試の合格者に比べ、学力面で差があることを懸念し、合格後入学までの間に課題を課す大学やAO入試自体を廃止する大学もあらわれるようになりました。

近年、四年制大学への進学が六割を超えるようになりまし。大学進学者には、「卒業後の給与形態がよいからとか。正社員の割合などが高いから」という理由を挙げる人がいる一方で、「何をしたいかわからないから」という人もいます。親は親で子供を大学に行かせているということだけで満足してしまっています。「大学卒業」という冠が、就職に有利に働くとは言いが切れない昨今、本人の能力・努力・才能次第で、学歴はそれを底上げする「パワーアップのアイテム」と考えるべきなのではないでしょうか。

オーストラリアでは、『H・S・C』（High School Certificate）とこう統一試験を高校卒業に際して設けています。大学進学にはその試験と共に、高校時代の学習意欲や人格、将来への目標などを加味した総合評価で、進学先が決定する制度を取り入れているのです。その結果、人々は大学入試後の学習意欲も低下することなく、また社会人としての就労意欲を欠くことなく自らの選択した仕事に従事されていると聞きます。

そんな中、東京大学（以降、東大）で二〇一六年の入試から推薦入試を導入するという方針が固められました。後期日程の二次試験で筆記テストを廃止し、百名程度ではありますが高校からの書類や面接による選抜となるようです。人数としては決して多くないものの、それは「受験秀才」ではない有能な学生を得たいという慶応のAO入試の導入と類似しています。しかし、慶応が国内を意識したものであったのに対し、東大はグローバルな大学間の競争を意識したものだといえます。東大は誰もが知る日本のトップの大学ですが、論文数を指標とした国際ランキングでは世界のトップ二〇にも入ることができません。その理由を、東大の学長は、「学生の大半が首都圏や中高一貫進学校の出身で、あらかじめ『正解』のある問題を手際よく解く能力に長けた学生。女子学生や留学生が少ない環境では、学生自身が切磋琢磨して社会で必要な力を身につける機会が乏しく、世界で通用する独創的な研究者や多方面でのリーダーとなる人材が育つのは難しい。」と述べられています。先に記したようにAO入試や推薦入試では学力試験を課さず、一般入試での合格者との学力差が問題となっていました。

それを踏まえて今回の東大入試では、推薦合格者にセインター試験の受験を課しています。内定を取り消すこともあるということです。今回の東大の取り組みが、才能と人格の備わった人材発掘の指針となる制度となつてほしいものです。

日本には「文武両道」という四字熟語があります。この言葉を聞くと、正々堂々とした人格者が目に浮かびます。現代日本において、正にそのような人物の登場が待たれます。『論語』の子張（孔子が彼の才能をもつて、「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」と評した人物）の言葉に、「博（ひろく）学びて篤（あつ）く志す（学問をするには、ひろく何事も学ぼうという心掛け、学んで得た道は、大切に心に納め、これを実行に移すようにしなければならぬ）」とあります。

さて、寅さんの博識を持つてすれば、今回の入試制度では……

